

日本型思考と イスラエル

メディアの常識は世界の非常識

滝川義人 著

**日本の新聞テレビ雑誌を
そのまま信じますか**

イスラエル・ユダヤの真実を知ることは
国際化時代に不可欠な常識

ミルトス 定価 1800 円＋税

日本型思考とイスラエル／目次

§二〇〇五年§

- “文明間対話”を提唱する国？ 9
真の“構造的な”問題は何か 14
米国をタネにした陰謀論 19
歴史上稀な占領地返還の勇断 25
いつか来た道 30

§二〇〇六年§

- シャロン首相の真の功績 35
あることないこと 40
ハマス政権がもたらす惨状 45
“グン”フィクション映画を斬る 50

イスラエル禍という暴論 55
対ヒズボラ戦争と傍観者 60

§二〇〇七年§

受難の民は度を越して攻撃的？ 65
「世界支配」というユダヤ禍 71
自閉する「中東のゲットーから」 76
「バカの壁」のユダヤ誤解 81
“非暴力”と言いながら平和共存を否定 86
ガザへの経済制裁を読む 91

§二〇〇八年§

反イスラエル論の事実歪曲 96
九・一一事件の妄想 101
北京オリンピックを前に 106

パレスチナ難民発生の真相 111

損害比一対三を境に過激化？ 116

閉鎖回路内の呪詛 121

§二〇〇九年§

ガザの光景 126

壁と卵 131

米国の世論・国益と中東支援 136

パレスチナ問題は万病のもと？ 141

帰還運動と侵略主義の違い 146

イスラエル・パレスチナ平和作りの旅 151

§二〇一〇年§

中東を冷静に評価する眼を 156

ピリン村 161

ユダヤ人の反ユダヤ主義 166

ボイコットは繰り返す 171

ゴミ捨て場の風景 176

感覚の世界に遊ぶ日本の危うさ 181

2011年

ナチの絶対悪は御用済み？ 186

アラブ民主化の本質 191

鯨、天罰、陰謀、予告 196

パレスチナ国家建設を拒否？ 201

バーチャル国家 206

一対一〇二七は人命軽視の証？ 211

2012年

架空の世界に遊ぶ人々 216

イランを叩けばアラブが団結？	221
真打ち登場？	227
古武士シャミール元首相逝く	232
慰安婦問題がユダヤ禍に？	237
ニュルンベルクから七十七年	243
パレスチナ問題の障害因	248
『聖地エルサレム』という本	253
知られざるガザの現実	258
人と組織の品格	263
真の武器輸出大国はどこ？	268
三十年で国境が消滅？	273
あとがき	279
関連年表	284

凡例

一、本書は隔月刊誌「みるとす」に連載中のコラム『日本の非常識から見た世界の非常識』二〇〇四年四月号より二〇一三年十二月号の分を編集加筆してまとめました。

一、各章タイトルの下にある数字は、雑誌に初出した年月を表示するものです。

一、本文中の人物の肩書きは、初出記事当時のままです。

一、著者が引用しているMEMRIとは、The Middle East Media Research Institute（中東報道研究機関 メムリ）の略称で、中東域の原語で伝えられるメディア情報をモニターし、リポートしているNGOです。文中のさまざまなテレビ発言は、MEMRIのモニターした画像からの翻訳です。

一、注*において、発刊時における最新情報を補いました。

日本型思考とイスラエル

メディアの常識は世界の非常識

“文明間対話”を提唱する国？

——イランのイスラエル敵視は矛盾ではないか——

2005.4

一部の日本人は、イスラエルのことになると何故か別任立ての尺度を使う。

例えばパレスチナ人のテロがあると、NHKのアナウンサーは決まって「暴力の応酬が懸念されます」とつけ加える。イスラエルのテロ対策を先取りして御丁寧にも「暴力」と定義しておくわけである。そこにはイスラエルの「暴力」がなければ連鎖反応はない、といったニュアンスさえ込められている。

テロならほかの国でもよく発生する。スペインはバスクがテロをやるし、サウジアラビアもターゲットになる。パキスタンでも頻発している。

しかしNHKのアナウンサーが「このため、暴力の応酬が心配される」と言うことはない。イスラエルの「核」問題でも、イスラエル政府や軍が認めたわけでもないのに、勝手にイスラエルに「核兵器を保有」させ、わざわざ現地へ行って抗議する。二〇〇四年四月二十一日、

イスラエルの技術者モルデハイ・バヌヌ氏が釈放されたとき、日本の「反核」愛好者がイスラエルの刑務所前で待ち構え、バヌヌ氏の釈放を喜ぶと共に、イスラエルの核政策を批判、近くの店舗に怒りの生卵を投げつけて、帰国した。

しかし、この種の人は、核兵器の保有を公言する北朝鮮やウラン濃縮をやめないイランへ直接出向いて、抗議することはない。強権国家に対しては、その勇気がないということか。

イランは穏健派か？

イスラエルは中東唯一の民主主義国家である。日本人は、それを寄つてたかつて強硬派に仕立てようとする。逆に、何とか穏健派の範疇へ入れてさし上げたいと、過分の扱いをされる国もある。外務省がいうところの中東の資源大国、イランである。

日本国外務省のホームページを見ると、日本は「改革派ハタミ政権が進める国内改革及び国際社会との緊張緩和・関係拡大路線がイラン及び地域の安定に資するとの観点から、これを支持・支援」し、「ハタミ大統領が提唱する『文明間対話』の理念が国際社会の平和と安定、人類共存の実現に資するものとしてこれを支持」するようである。

そのハタミ大統領が二〇〇〇年十月末に公賓として来日したとき、NHKの「クローズアップ現代」がインタビューした。国内的には改革、対外的には緊張緩和と関係拡大、そして文明間対話に焦点をあてた内容で、まさに日本の外務省が主張する方向へ、イランがひた走りに

走っているという線でもとめられていた。筋書きどおりである。

ミサイルと核開発

そのイランは中東のテロ組織を今でも支持している。イスラエルやユダヤ人社会、現イラクをターゲットにテロをやる連中である。

イランが誇示する中距離ミサイルのシャハブ3は、北朝鮮の技術協力で開発されたものであり、一〜二年前の軍事パレードに登場したそのミサイルの胴体には、シオニストの牙城テルアビブを叩くといった怖いことが書いてあった。イスラエルの存在を認めず、その首都エルサレムを認めないというメッセージもちゃんと含まれている。

長、中距離ミサイルは核弾頭と組合せなければ、意味がない。一トン足らずの通常弾頭では、脅威にならないからだ。つまり中距離以上のミサイル開発は核開発と二人三脚で進められるのであり、イランは平和目的と称しながら、軍事用のウラン濃縮（二〇〜九〇％）をめざしている。民需用であれば低濃縮（三〜七％）で充分であり、EU三方国（英仏独）は、低濃縮ウランと軽水炉を提供する代わりに、核燃料サイクル能力の確立と濃縮活動を放棄せよ、と提案した。

イランはこの提案を拒否している。主に軍事用として使われる重水炉の放棄もノーである。二〇〇四年十一月のパリ合意で、濃縮活動が完全中止になると思いきや、イランは暫定的な停

止にすぎず、合意に法的拘束力はないと主張。国際緊張を大いにたかめている。[※]

※5+1とイランとのジュネーブ核協議は、二〇一三年十一月二十四日、「ジュネーブ共同行動計画」を採択して終わったが、イランは核兵器開発につながる国内濃縮権を確保した。イランのザリフ外相は、二〇%濃縮も続行、と同日ジュネーブでの記者会見で述べている。

ホロコースト否定論者

二〇〇五年一月二十七日は、アウシュヴィツ解放六十周年の日で、その收容所跡にイスラエルと欧米首脳、宗教界代表が集い、人種主義の克服を誓いあつた。

その対極にあるのも、「文明間対話」の提唱国イランである。

テヘランタイムズ、イラン国営通信などは、ホロコーストはでつちあげ、ユダヤ人は諸悪の根源といったネオナチ顔負けの人種主義報道を流す。そしてそのネオナチにお馴染みのロベール・フォーリソンも、国営通信（二〇〇四年十二月十八日付）で、インタビュールされた。フォーリソンは社会の周辺部でうごめくホロコースト否定論者。まともな報道機関なら相手にしない。

ユダヤ人社会への歪んだ心

中東アラブ・イスラム圏には人口の数ほど意見があつて然るべきだが、宗教界、政府、報道

機関が表明するものは、イスラエルとユダヤ人社会を対象にすると、極めて人種差別の濃厚なものとなる。

二〇〇五年二月初旬、サウジアラビアが国際テロ会議を開催し、日本を含む五十を超える国と国際組織が参加した。本番前に開催された予備会議の席上、出席したスルタン国防相をたたえる詩が読みあげられている。

「オサマ・ビンラーディンはユダヤ人が送りだした」という内容である。オサマ・ビンラーディンはサウジが生んだ自前のテロリストだが、それをユダヤ人のせいにする。

昨年末のスマトラ沖地震津波で大被害をこうむったイスラム国インドネシアは、世界中に救助支援を要請した。ところが、イスラエルの支援提案だけは、はねつけた。イランもそうである。

地震に見舞われ、耐震性のない建物が容易に倒壊し、いつも多数の犠牲者をだして各国に救いを求める。が、イスラエルからの支援の手は拒否する。双方ともイスラム国で、ユダヤ人社会に対する歪んだ心が共通する。